



洋上アルプス

No.362 令和7年度

11月



2025年11月25日（火曜日）安房中学校にて森林教室を実施

11月25日（火曜日）に安房中学校1年生23名に対して、当保全センター及び屋久島森林管理署の職員で森林教室を実施しました。

当日は、校庭に植栽されている樹木の学習と林業について講義を行いました。

樹木の学習では、林野庁職員が作成した「手作り図鑑」を使用し、班ごとに分かれて校庭に植栽されている樹木を何本かピックアップし、樹木を特定してもらった後、答え合わせを行いました。葉っぱを見ただけで樹木名がわかる生徒もおり、樹木への関心の高さを感じました。答え合わせ後の解説では、熱心にメモを取っている姿が印象的でした。

林業についての講義は、3学期の体験活動に向けた事前学習として実施しました。屋久島での苗木生産・下刈り・地拵えの様子について、写真等を使用して講義を行い、高性能林業機械の動画を観賞した際には、そのスケールの大きさに驚いていました。

最後に、キャリア教育の一環で「なぜ林野庁や環境省に入庁したのか」について、2名の職員から話をしてもらいました。

アンケートの結果から、森林・林業に興味のある生徒もあり、今回の森林教室が将来の職業選択肢の参考になってくれたらと思います。



屋久島での苗木生産について説明（左）、校庭で手作り図鑑を使い樹木調査（中）、入庁について思いを語る

2025年11月20日（木曜日）松枯れ被害は減少傾向にあるが「優先的な対策を」

当保全センターにおいて、「令和7年度松枯れ対策連絡協議会屋久島支部会」が開催されました。

この協議会は、学識経験者や環境省屋久島事務所、鹿児島県屋久島事務所、屋久島町、林野庁などの行政機関等で構成され、関係機関が情報共有をしつつ松枯れの被害対策を実施するものです。

会議では、各機関から昨年度の屋久島における松枯れ被害対策の実施報告及び7年度の被害の現状と対応についての報告がされるとともに、効率的・効果的な被害対策について検討されました。参加者からは、これまでの被害に対する対応と対策により減少傾向にあるものの、引き続き優先順位に沿った対策を実施願いたいとの意見が出されました。

また、森林総合研究所九州支所の金谷主任研究員及びヤクタネゴヨウ調査隊手塚代表から、絶命危惧種ヤクタネゴヨウの衰退についての説明など幅広く情報提供があり、引き続き各機関が連携を図りながら取組んでいただきたいとの意見がありました。

最後に屋久島森林管理署を代表して歌野森林技術指導官から、皆様と情報を共有し連携を図りながら対策を講じて参りたいとの挨拶があり、今年度の会議を終了しました。



会議全体の様子（左）、情報提供（金谷主任研究員）（中）、屋久島署の対策説明（岩下業務総括）（右）

2025年11月18日（火曜日）湯梨浜学園高等学校（鳥取県）の屋久島研修生を受入

湯梨浜学園高等学校は、文部科学省からスーパーイエンスハイスクール（SSH）に指定され、野生鳥獣による森林被害対策等が進んでいる屋久島において、実践的な調査手法や対策方法等を学ぶため、昨年度から11月に屋久島を訪れており、今年は2年生19名が来島しました。

当日は、船行国有林で現地実習を予定していましたが、バスの都合で現地へ行けなくなったため、急遽、当保全センター会議室においての座学研修となりました。

下村保全センター所長より屋久島の森林と当保全センターの業務概要を説明し、生徒からは生物

多様性の考え方などについて質疑がありました。その後、古市行政専門員からヤクシカによる被害状況や職員による捕獲等について説明し、実際に笠松式くくり罠を会議室で仕掛け、生徒に杭を使って作動してもらいました。生徒たちは罠が作動し上手く杭がくくられる様子に驚いていました。この研修が鳥取でのシカ被害削減に少しでも役立つことを期待したいと思います。

当保全センターでは、このような取り組みをとおして、森林の持つ多様な機能への理解とその必要性について、生徒たちの好奇心や探求心が広がり、深化するきっかけとなるように活動を続けてまいります。



座学研修の様子

2025年11月14日（金曜日）安房中学校森林教室を実施

11月14日（金曜日）に安房中学校2年生を対象に森林教室を実施しました。

今回も学校側と事前打ち合わせを十分に行い「現地状況の確認と体験型」となるようカリキュラムを検討し実行しました。

当日は、屋久島森林管理署とともに安房貯木土場・白谷雲水峡（弥生杉コース）を見学後、当保全センターに移動し、講義や体験活動を行いました。

安房貯木土場では、署職員から屋久島の林業の歴史やヤクスギ土埋木などについて説明がありました。生徒は初めて見る土埋木を興味深く観察し、時折、質問も交えながら、見学を行いました。

白谷雲水峡（弥生杉コース）では、奥村自然再生指導官より、弥生杉が倒伏した経緯や、これまでの取組、そして今後の取扱について、現地で実物を見ながら説明を行いました。生徒からは「弥生杉が倒れているのを初めてみた。すごく大きくて印象に残っている」や「後の世代の人々にも守っていってほしいという思いがとても伝わりました」といった感想を聞くことができました。

講義では、下村所長より当保全センターの業務について説明、署の歌野森林技術指導官や塩澤主事からは、林業遺産や小杉谷の歴史について初公開となる土埋木搬出の映像を鑑賞しながら説明がありました。言葉や資料だけでなく、映像を交えることでより一層、理解を深めてもらえたと思います。

体験活動では、丸太切り体験と木工体験（箸・箸置き・コースターの3種）を行い、普段使う機会が少ないノコギリやカンナの使い方に苦労しながらも、思い思いに作業を楽しんでいました。

今後も様々な森林教室を実施し、屋久島の子どもたちに屋久島の森林や林業について学びを深め

てもらえるよう、努めてまいります。



土埋木の説明に聞き入る生徒たち（左）、弥生杉の今後について（中）、好評の箸作り体験（右）

2025年11月06日（木曜日）森林・林業の技術交流発表大会で発表

九州森林管理局大会議室において、令和7年度 森林・林業の技術交流発表大会が11月6日から7日にかけて開催され、森林技術部門など21課題と九州局管内の高校から5課題について発表があり、当保全センターからは、「屋久島の林業 苗木を育て次の世代へ～台木誘導試験～」と題して、奥村自然再生指導官と塩澤主事が発表しました。

戦後植林したスギは収穫期を迎え、屋久島でも今後計画的な主伐と更新等が進められると考えますが、更新に必要なスギ苗木については、さし木によるコンテナ苗の生産も増えつつあるものの、65%は実生苗木が占めており、山奥でスギ天然木からの採種、そして育苗期間が長いところに労力を要しています。

そこで、まず将来の苗木の需要量の見通しを関係機関でしっかりと共有すること、そのうえで育苗期間が短く成長にあまり差のない、さし木によるコンテナ苗を増産することが必要と考えています。その際は、穂木を採る台木が近場に整備されれば、コストの軽減につながると考え、屋久島での台木づくりを確立させ民有林へ普及させるため、まずは国有林のフィールドを活用して台木として仕立てるための試験を森林総合研究所九州育種場等と連携し取り組んでいることを発表しました。

鹿児島県も採穂園等の整備をしていることから、この取組が屋久島の林業を持続可能なものとする一つになればと考えています。



発表する当保全センター職員（左）、スギ台木の断幹（中）、台木からの萌芽状況（右）

2025年11月04日（火曜日）屋久島森と人との共生ビジョン策定ワーキング会議の開催

屋久島町役場において、第2回「屋久島森と人との共生ビジョン策定ワーキング会議」が開催されました。

事務局から、森林ゾーニングの作成手順及び民有林のゾーニング図、屋久島版森林ゾーニング、今後のスケジュールについての3案が示され、項目ごとに詳細な説明があり提案されました。

森林ゾーニングの作成手順として提案された、「もりぞん」（森林ゾーニング支援ツール）による評価と屋久島町の公益的機能別施業森林との統合や民有林のゾーニング図について、参加者から多くの質問や意見が出されるなど活発な議論となりました。特に今後の林業経営の主軸となるエリア及び希少種等の生育場所等の反映などについては、これから現地確認等を行いながら進めて行くことが重要との意見が出されました。

更には、第1回目の会議において、多くの意見が出された森林環境教育の場や体験林業が可能なエリアについても、屋久島版森林ゾーニングの項目に追加する方向で検討して貰いたいなどの意見が出されました。

今後の議論は、今回提案されたゾーニング案を現地にて確認・検証し、適切に反映できるかどうかを判断し、意見交換を行いつつ方向性が決まっていくものと考えます。

世界自然遺産地域を抱える「これからの中久島」のためにも大変重要な役割を担っている会議と考えており、当保全センターとしても関係者等と連携しながら取り組んでいくこととしています。



ワーキング会議の様子（左）、ゾーニング案について発言（右）